駒場友の会 会報第16号

学際交流ホール改装記念演奏会

学際交流ホールの改装を記念して、第一〇回駒場友の会演奏会を十一月五日（金）に開催しました。演奏は、ハープの篠崎和子さんと、フルートの東田夏織さん。お二人は国内外で活躍中の新進気鋭の演奏家です。

舞台中央に黄金色に輝くグランドハープ、右手には黄色と白のバラが生けられたホールは華やかな雰囲気にあふれ、心地よい熱気に包まれました。

バロックから近代までのフルートとハープの名曲が選び抜かれたプログラムで、二重奏としてバッハのフルートソナタ、メンデルスゾーンの無言歌集、フランセの小品、ビゼーのカルメンより間奏曲、イベールの間奏曲、グルックの『精霊の踊り』、ボルヌのカルメン幻想曲、ハープ独奏としてトゥルニエの演奏会用練習曲が演奏され、アンコールは、フォーレの子守歌とイベールの間奏曲の後半となりました。

新装された学際交流ホールにふさわしいフルートの伸びやかな音とハープの気品あふれる響きを、お二人のすばらしい演奏で堪能しました。

寺神戸亮さん演奏会

バロックヴァイオリンの奏者として世界的な名声を博している寺神戸亮（てらかど りょう）さんをお迎えして、十一月二五日（木）に演奏会「シャコンヌへの道」を開催しました（オルガン委員会と共催）。昨年四月に開催予定でしたが、アイスランド火山噴火により欧州空路が閉鎖され、やむなく中止となっていました。

無伴奏ヴァイオリン曲の最高傑作といわれるバッハのシャコンヌを最後の曲として、それに至るまでに作曲されたバルツァー、ビーバー、テレマン、そしてバッハ自身による無伴奏曲が順に演奏されました。まさにシャコンヌへの道を、当時の楽器による名演奏で、演奏者のすぐ近くで聴けるというまことに贅沢な機会となりました。

とりわけ、ヴィオロンチェロ・ダ・スパッラ（肩からかけたチェロ）によるバッハの無伴奏チェロ組曲第一番と、最後のシャコンヌ ニ短調は、心の琴線に触れるすばらしい演奏でした。

駒場の樹木を楽しむ会

今年で第九回となった東京大学ホームカミングデイ行事の一環として、十一月十三日（土）に恒例の「駒場の樹木を楽しむ会」を開催しました。

講師はこれまでの梶幹夫先生から交代して芝野博文先生。先生は本学大学院農学生命科学研究科准教授で北海道演習林長を昨年から務めておられます。「富良野の森を歩く」と題された講演は、東京の山手線に囲まれた面積の三倍あるという北海道演習林の自然の雄大さ、森林の多様性、森を維持する営みの困難さなどどれも興味深く、一同、時間を忘れて聞き入りました。

講演のあと、先生の引率で会場周辺の樹木を観察しながら、おなじみの樹木プレートを取り付けました。今年は子ども連れの参加者も多く、とても和やかな雰囲気でした。

GENKI BOOKS @駒場図書館

駒場図書館一階中央に、GENKI BOOKSというコーナーが誕生し、利用者で賑わっています。

これは「男女共同参画社会」の実現という国や大学の方針を受け、駒場友の会が会員会友の皆様からお寄せいただいた「学生のための寄付」を活用し、図書館に多数の図書を寄贈することで新設されたものです。

男女学生が将来にわたって共に自立し理解しあって生きていくライフスタイルを提案する本を多数揃えています。

図書館で購入する学術書以外の分野の図書に力を置き、若い利用者から大変に好評をいただいています。国立女性教育会館から貸与されている図書も多数配架されています。

詳細は、http://lib.c.u-tokyo.ac.jp/をご覧ください。

駒場キャンパス七十年の点描

竹田　晃

駒場の歌

武蔵野のほとり駒場の杜かげ
緑濃き木立し歌ひ
悠遠の生命(いのち)ぞこもる
あゝ我等若き日ここに集ひて
いざや讃へむ駒場の自然を
大空の光いみじくさゝやき
豊かなる恵みを抱き
万象の法(のり)をし求む
あゝ我等すこやかに力つちかひ
永遠(とは)に仰がむ駒場の理想を
萌え出づる嫩草(わかくさ)散り敷く
　銀杏葉
五十年(いそとせ)のいのちは古りぬ
大いなる時こそ栄あれ
あゝ我等新しき望み抱きて
高く謳はむ駒場の使命を

この歌は、昭和十年(一九三五年)二月三日に、東京帝国大学農学部学友会によって制定された。現在の東京大学駒場Ⅰキャンパスは、昭和二四年までは旧制第一高等学校、さらに遡って昭和十年までは東京帝大農学部のキャンパスであった。

私の教養学部長在任中の昭和六一年の夏のある日、ドイツ語の信貴辰喜教授が一巻のカセットテープを学部長室に持って来られた。それがこの「駒場の歌」のテープであった。信貴教授は自他共に許すSPファンだったが、同じくSPファンの一人の学生が「駒場の歌」のSPを手に入れてそれを信貴教授に見せたものを、教授がテープにコピーして学部長室に贈って下さったのであった。そのレコードの記載によれば「駒場の歌」は、作詩青戸精一、作曲信時潔、独唱城戸又兵衛、ピアノ伴奏今井治郎、とされる。なお右の詩の表記は、信貴教授がレコードを聴いて推定されたものである。

私がこの駒場のキャンパスに初めて足を踏み入れたのは、昭和十三年、小学校二年生の時だった。当時一高で教鞭を執っていた(漢文担当)私の父がたまたまこの年に一高の野球部長に就任した。その頃ゴムマリ野球や三角ベースなどの遊びを覚えたばかりだった私を、父は一高の野球を見せに駒場の野球場に連れて行ったのである。

渋谷から「郊外電車」と呼ばれていた帝都電鉄(現在の井の頭線)に乗り、一高前駅で下車して入った一高のキャンパスは、詳しいことは忘れたが、非常に明るく郊外と呼ぶにふさわしい雰囲気だったように記憶している。その後私の人生に大きな意味をもつようになる野球の私における原点は、じつは駒場の一高の野球だったのである。

昭和二四年七月、新制東京大学教養学部第一期生として入学、私は駒場キャンパスで二年間の学生生活を送ることとなった。旧制一高の三年生と同居のキャンパスは、まだ戦争の傷跡を色濃く残していた。教室の煖房などはもちろん無く、時には時計台の屋上の脇の陽だまりで、先生を囲み車座となってテキストを読んだこともあった。

昭和四十年十月、私は専任講師として教養学部に着任した。私の所属する国文学・漢文学の研究室は一高当時の南寮(当時の通称は一研)の三階だった。初めて研究室を訪れた時、先輩の市川安司教授から受けた最初の御注意は「窓が錆びついているから、力を入れて開けようとして、窓ごと外へ跳び出さないように」というものだった。

駒場キャンパスには、一高時代からのソメイヨシノや八重桜の古木が、春と共に咲き誇り、すばらしい景観を呈してくれる。加えて、教養学部発足以来長年にわたって学部の経営に尽力された青木庄太郎元事務長のアイディアで植えられた野球場の三塁側斜面の数本のシダレザクラは、いまではすっかり成長し、その花盛りの美しさはまことに圧巻である。

いま、駒場キャンパスを歩いてみると、私の学生時代・教官時代には無かった立派な、モダンな建造物が所狭しと立ち並んでいる。やや過密の感を免れないキャンパスの状況であるが、それでも北・西部をグラウンドに取り囲まれ、随所に緑濃い木立の見られるこのキャンパスは、都内、特に二十三区内には例を見ない自然に恵まれたものである。この空間構成は今後長く守り続けていただきたい。

駒場キャンパスの自然として誇り得るものに、キャンパスの東西に湧き続ける二つの清流がある。東隅の流れは近年立派に整備された一二郎池に注いでいる。ここでは特に西隅のささやかな流れについて触れておきたい。この流れは古くから存在していたのだが、昭和四十年頃の第二グラウンドの整備に伴う下水工事の影響で、一時途絶えてしまった。すると、ある日の教授会で、図学担当で俳人でもある小佐田哲男教授が発言を求め、この流れを駒場の象徴として是非復活させてほしい、と力説された。それがきっかけとなって今日見られるような清流(右写真)が蘇ったのであった。私はそこでこのささやかな流れを「小佐田の泉」と命名することを提案したのだが、残念ながらこの名称は定着しなかったようである。

その小佐田氏も昨年亡くなられた。謹んでご冥福をお祈りする。筆を擱くに当たり、小佐田氏の御霊に捧げる駄作を一句

みどり萌ゆ　小佐田の泉

生命(いのち)ありて

(本稿「駒場の歌」「小佐田の泉」などに関しては、「UP」一七四号(一九八七 東大出版会)に寄せた拙稿「駒場の春」から採録した部分が多い。)

(本学名誉教授、駒場友の会副会長)

リコーダーの世界へ

本村　睦幸

昨年五月、駒場友の会の第九回演奏会にお呼びいただき、リュートの金子浩氏とともにリコーダーとリュートの編成で演奏させていただいた。その前にも二〇〇一年にオルガン委員会の演奏会にチェンバロの上尾直毅氏とともに出演させていただいていた。そのようなご縁を機に駒場友の会に加わることができて大変嬉しい。

大学での学問に憧れて理科一類に入学したものの、実際には中学時代からの夢であったリコーダー奏者になることに向けて突き進むのみであった私にとって、駒場は幾分ほろ苦い思い出の場所である。その場所にこういう形で再訪できたのは、どこか照れくさいような感慨深さがある。

「東大を出たのになぜリコーダー奏者になったのですか?」とよく訊かれる。自分にとっては、少年の頃以来の志望に従って来ただけのことなので、なかなか答えに窮する。

「東大を出たのに」はともかく、リコーダーという楽器の可能性とその音楽の魅力については、大いに語っておきたいところである。

リコーダーは日本の学校教育での縦笛として親しまれているが、本来、バロック以前のヨーロッパで主要な木管楽器の一つとして広く使われ、当時は単にfluteと言えばリコーダーのことを指していた。現存する最古のものは十三世紀に遡る。二〇世紀に復興してからは、現代作曲家による作品も多く書かれている。つまり、西洋音楽史の七〇〇年以上に渡る幅広いレパートリーがあるのである。聴く人は、様々なスタイルに触れるたびに、これがリコーダー?これもリコーダー?と思われるに違いない。

リコーダーは、近代になって発達した他の楽器に損なわれてしまった特質を備えている。たとえば、音と音の間を明瞭に区切ったり滑らかにつなげたり(アーティキュレーションと呼ばれる)のコントロールの精妙さである。区切るかつなげるかの選択でなく、その間のグラデーションを直感的に紡ぎながらフレーズを組み立てることができる。明瞭に粒立ってかつ滑らかというような表現が多彩に可能である。これは近代以降の楽器がダイナミックレンジの拡大に伴って犠牲にして来たこととといってよい。

もう一つ挙げるなら、音程の自由度の高さである。息の流れの変化が即座に音程に反映するし、音孔キーがないので、音孔の縁に少し触れるというようなことでも音程が変わる。これは一瞬一瞬の状況に応じた透明な和声や緊張感のある和声を作り出すのに不可欠なだけでなく、音程のわずかなゆらぎによるニュアンスの表現にも長けているということなのである。近代の管楽器は音程の安定や運指の簡易化と引き換えに、そのような自由度を減じて来たといえよう。

確かにリコーダーは大ホールでの演奏には不向きかもしれないが、小さなサロンでは実に雄弁なのである。

興行的な演奏のためでなく、絶対王政の時代に貴族たちが自ら演奏する楽器として発達して来たためであろう。したがって、リコーダーを軸とした音楽活動は、演奏会のあり方、音楽の楽しみ方そのものへの問いにまで踏み込む必要がある。それは、決して復古的なことではなく、現在的意義を持つと信じる。

よくいわれるように、古楽復興もLPレコードやCDの普及の賜物である。メディアの発展は音楽のあり方も変化させるが、その中にあって、数世紀前の貴族的ディレッタント音楽のあり方をどのように現代化できるか、取り組みがいのある課題と思っている。

「東大を出たのに」進んで来た世界はこのように奥深く豊穣である。おそらく昔も今も駒場のあちこちに「なんか違ったことをやってる奴」がいることだろう。かつてのその一人からすれば、駒場は、文理問わず学問に邁進するすごい奴から、一風変わった奴まで、様々な友人たちと過ごした思い出深い場所である。

ほかならぬリコーダーをきっかけとして、その場所と再び繋がることができたのを幸せに感じている。

(工学部八四年卒、リコーダー奏者)

駒場キャンパスの子どもたち

落合　秀子

園舎に聴こえてくるお兄さんお姉さんの歌声や楽器の音色、トンテントンテンと軽やかな音、体育館からの勇ましい掛け声や賑やかな音、空きスペースで大道芸の練習をしているお兄さんにくぎ付けの子どもたち。

キャンパス内にある駒場保育所の子どもたちは、学生たちの楽しそうな姿を横目に、毎日負けじと元気に走り回っています。

その昔駒場は「駒が原」と言われ、将軍様のお狩場だったそうで、当時の面影をあちらこちらに残しています。昨年十一月二五日放送のNHKの「ブラタモリ」はそうした歴史を紹介するものでした。撮影には、このたび学部長になられた長谷川壽一先生が大型犬スタンダードプードルの「キクマル」を連れて園舎脇に登場。子どもたちも一緒

にカメラに入り、大喜びでした。クリスマス会の行事にキクマルにはトナカイ役、長谷川先生にはサンタ役で登場していただいたことがあるので皆大好きなのです。

二年くらい前から、十名ほどの学生が子どもと遊びながら行動を観察する授業が園で開かれています。子どもたちは毎回お兄さんお姉さんがどんな風に遊んでくれるのかを楽しみにしています。

思いっきり体ごとぶつかっていく子ども、恥ずかしくてもじもじしながらも近くに寄って行き話しかける子ども、人見知りをして泣き出す年齢の小さい子どももいます。少しずつ慣れ、学生がそばにいても平気になり普段の生活を始める子どももいて、様々です。

学生たちも戸惑いながらも懸命に子どもたちの中に入ってコミュニケーションを取ろうとしています。その様子を見ると、お互いによい刺激になっているなと思います。夕方のアルバイトで保育の補佐をするなど顔を合わせる機会が多いと名前で呼び合うくらい距離感が縮まっていきます。少子化の今、小さい子どもと触れ合う機会の少ない若い人たちにも良い経験になるのかもしれません。

保育所は〇歳から五歳までの子どもたちが朝から夜まで過ごす生活の場です。六年前からは小学生に放課後の居場所を提供しています。五〇人の園児たちは毎日のように散歩に出かけ、四季折々の構内を探索して歩きます。

春はイタドリを食べ、野イチゴに舌づつみを打ち、桑の実をほおばっては口の周りを真黒にしています。駒場池(一二郎池)でザリガニを素手で掴み、数理科学研究科の裏ではヤマモモの実を収穫し、空き地に咲いている野の花を花束にして楽しみ、夏は蝉の抜け殻を手のひらいっぱいに集めてブローチにしたり、トンボや蝉を捕まえたり、蝉の脱皮に感動し自然界の神秘を垣間見ることができます。

秋はどんぐりや松ぼっくりを拾っては制作に活用し、椎の実や銀杏は炒っておやつ代わりに食べて秋を味わっています。キャンパス内は大きな木が沢山あるので広葉樹の落ち葉が山のようにあります。この落ち葉でかくれんぼ、フカフカのベッドにして飛び込みジャンプなど十分に楽しんで遊んでいます。落ち葉を集めて焼き芋もしています。もちろん消防署や大学には届けていますよ。

冬は木枯らしが吹いていても元気に外へ飛び出して冷たい空気に触れて遊びます。子どもは大人が思うほど寒がりではありません。汗をかきながら走り回っています。子どもたちにとって自然はかけがえのないものであり、子どもの成長に欠かすことのできないものです。構内の自然の恵みのありがたさを感じながら、日々保育ができることに感謝しています。これからも学生さんたちと交流したり、四季の変化を楽しんだりしながら保育を行っていきたいと考えています。

保育所は今年五月一日に設立四〇周年を迎えます。大学の中に誕生してから四〇年の歳月が流れたわけですが、これまで沢山の方々のご支援やご理解ご協力があったからこそ続けて来ることができました。関係者の皆さんに心よりお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

(東大駒場地区保育所園長)

ストレッチ体操特別教室のご案内

渡會公治先生の「中高年のための美しく立つ教室」は、四月からは第一、第三週の水曜日に開催します。時間は午後一時から二時まで。会場は、駒場コミュニケーションプラザ北館三階。会員会友限定。要予約。駒場友の会事務局(〇三－三四六七－三五三六)で予約を承ります。

新入生歓迎特別講演会のお知らせ

ロバート・キャンベル教授による「大学って、むずかしい?それともやさしい? 本当はむずかしい」四月二二日(金)午後六時二〇分から同封のチラシをご覧下さい。駒場友の会の会員会友の参加も歓迎します。

穏やかな日差しの中でゆったりと
くつろぐことのできる

フランス料理
ルヴェ ソン ヴェール 駒場

駒場友の会の皆様がお食事の際に注文なさった
コーヒー・紅茶は、お支払いの際に会員証・会友証を
ご提示下さいますと無料になります。

営業時間　11：00 ～ 14：30、17：00 ～ 21：00
Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902
駒場ファカルティハウス内

駒場友の会会報　第16号
2011年3月10日発行
駒場友の会
〒153-8902
目黒区駒場3-8-1 東京大学
駒場ファカルティハウス内
電　話　03-3467-3536
FAX　03-3465-3334
郵便振替口座
00170-3-481649
メール
info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp
ホームページ
http://www.c.u-tokyo.ac.jp/ilovekomaba/
デザイン・印刷　株式会社双文社印刷
http://www.sobun-printing.co.jp